

郡ごと持ち回りで供養を続けました。わが家でも、昭和二十七年に世話役を引き受けて、質素な中で心からの供養会をしました。昭和三十三年には、十三回忌の大供養会を善光寺大本殿にて実施し、以後は霊位を永久に善光寺に納め永代供養をしていただくように決まりました。

昭和十七年生まれの下の子も、帰国のときは栄養失調で、もう駄目かと思っていました。普通にも学校にも通い、今では孫もいる平和な日々を送っています。

主人は、戦前、戦中そしてシベリア抑留の苦勞がたつたって、昭和三十八年に五十五歳で病死しました。もう少し長生きをして欲しかったのですが、これも運命で致し方ないことでした。私は、主人の分まで長生きするのか……と感謝しています。曾孫も五人で「ひい様、ひい様」と呼んでくれて、亡くなった方々には申し訳ないくらいに、幸せな毎日です。

## 私と父の満州

静岡県 重岡 良之祐

昭和五年十月下旬に、私は生後二カ月で母に抱かれて満州の撫順に行きました。そして昭和二十一年十月九日に博多港に引き揚げるまでの十六年間、満州で生活しました。満州国の建国から滅亡までを体験したことになります。

幼児期については、母カツから聞いた話をそのままなぞることになりますが、私の満州体験は、父材輔の生活を回想しながら語ることになりました。

昭和六年の夏、母は、私を背負って撫順から奉天に向かいました。奉天にいた父に呼び出されたのです。奉天駅には、「大雄峯会」を主宰する満鉄地方課長の笠木良明さんと、父が迎えにきていました。

顔を合わせるや否や開口一番、父は「これから興城県に行ってくる」と言って二人とも行ってしまいました。

た。右も左も分からない奉天駅に置き去りにされた母は、途方に暮れてしまったと言っていました。

満州国の建国とともに父は、通遼県、海城県の参事官を経て、昭和九年の「省公署官制」の改革で、黒河省総務科長になりました。

その後、父は参事官として、賓県に行くことになりました。賓県は、建国当時に反旗を翻した、李杜と超丁が「賓県政府」を宣言して、反満抗日を打ち上げて、匪賊化したところです。

私は小学校に入る前でしたが、哈爾濱から賓県に向かう途中の様子は、子供心にも記憶しているのです。

兵隊さんに抱かれてトラックの運転席に乗りました。「匪賊が出たら、兵隊さんがやっつけてやるからね」と言っていました。それだけのことですが、子供心にも恐ろしい街に連れて行かれるのだなという不安があったのでしょうか。

でこぼこの道を、軍用トラックに揺られて賓県の県城に入りました。軍隊の護衛のもとに、県参事官が任地に赴任するのは異常なことだと後に思いましたが、

当時はそんな情勢でした。そんな様相の中で幼児期を過ごしました。

その後、賓県から満州国政府の民生部へ転任となったのですが、父は性格的に事務官としては不向きで、現場に出ることを求めているようです。

昭和十三年には、満州国政府の官吏を退職して、佳木斯に家族で移り住みました。なぜ、佳木斯を選んだのか分かりませんが、ここは開拓の地です。父の性格に一番合う所だったと思います。両親共に、佳木斯に新天地を求め、生涯の地と決めていたようです。

昭和十四年の夏、父は日本内地に、無銭旅行に出掛けることになりました。

完成したばかりの「佳木斯興亜塾・三江会館」の二階大広間に「南無妙法蓮華経」の曼陀羅を掛け、坊主頭になった父は、頭陀袋を首から下げ、地下足袋姿で「うちわ太鼓」をたたきながら出て行きました。

北満の辺境の地に残された家族は困りました。長男の私が小学校三年生で、その下に男ばかりの四人の子供でした。母は、子供たちをお手伝いさんに任せて、

三江会館で働きました。しかし、それだけでは生活が苦しかったので、満人学校の日本語の先生にもなって働きました。

父は、無銭旅行に出掛けるのが分かっているのに、職場を決めるのは身勝手な話だと思いました。給与も支給されていません。職場で毎日勤務していいない父に、給与を支給していたということは、どんな理由があったのでしょうか。一年後に父が取り組んだ社会事業に対する協力が、事前に行われていたのでしょうか。

協和会三江省本部の会務職員だった人の話では、「協和会の趣旨に沿った奉仕を目指していたからでしょう」と言っていました。それだけではなく、三江省警務庁の剣持さんという人は、自分の給与のなから毎月十五円を「重岡さん」といって、わざわざ三江会館に届けていたそうです。こういう事情を後年、父に聞かなかったことを残念に思っています。

多くの人たちの協力を受けていたのですが、我が家は大変でした。昭和十四年からの数年間、一家の生計

は、母一人で支えていました。当然、苦勞をしたわけですが、母の性格は、苦勞を苦勞とも思わないで「あるがままに」という生きる姿勢を通していました。

父の事業が形に現れるのは、無銭旅行から帰ってきからです。無銭旅行中に内地で笠木さんやその他の同志に会って、これからの方針を決めてきたのでしよう。

昭和十五年の春、無銭旅行を終えて佳木斯に戻ってきたときには、満人の孤児を連れていました。その年の七月に、佳木斯市中央大街の西側の民家が少なくなつたところに、「立正堂孤児院」を開設しました。父が、この辺境の地を選んで孤児院を建てたのは、満人の孤児、浮浪者が多くいたからで、救済が目的でした。

父の事業は順調に進みましたが、我が家の生活は苦しくなるばかりでした。

私の家は、佳木斯市城西區中央大街二十一番地で、孤児院事務所と道路を隔てた同じ敷地にありました。満人街の西の外れにあったということになりま

す。ほこりの舞い上がるでこぼこの道に面してしました。しかも、父の設計した家は、四十畳一間の殺風景なものでした。棟続きで、同じ広さの大豆食庫二室と管理人室があり、別棟に厨房がありました。広い厨房で、直径一メートルもある大鍋が二つも置いてあったほか、小さなかまどが数個並んでいました。

孤児院事務所は、四十坪ほどの広さで講堂までありました。

家の様子を詳しく記したのは、敗戦後に孤児院が、日本人難民収容所となったと聞いたからです。かつて中国訪問したときに、ガイドさんが、「日本人の救済院があったところですよ」と案内してくれました。満人のためにつくった施設が、日本人のために役立つとは、なんとも皮肉な話です。

孤児院のほうは、「街で見かけた」といって連れて来られる子もいて予想以上の成果を挙げていました。

日課である作業と勉強にも励むようになりました。「リュウジングイ」「リュウトククン」「サイジャミン」という名前の孤児がいたことを記憶しています。いず

れも父が、名付け親になっていました。孤児は、私と同年齢だったのでよく比較されました。父は、「良之祐よりも、しっかりしている」とよく言っていました。今、みんなはどうしているのかなと、思うときがあります。

ある日、生後六カ月にも満たない満人の赤ちゃんが、連れて来られました。やせて顔から手足まで、しわと垢だらけで、汚い布に包まれていました。

泣き声も「ヒィー、ヒィー」と、かすかに聞こえる程度で、このまま死ぬんじゃないかと思いました。

我が家では、妹の佳子が生まれたばかりでしたので、母の乳をもらいに来たのでした。母は、汚い布に包まれたままの赤ちゃんを受け取ると、すぐに乳を与えました。お手伝いさんが、「なんて汚い子だ。いくらなんでも、こんな子に……」と顔をしかめていましたが、そばにいた「ペー」という名前の満人の女は、感動したように見えました。

この赤ちゃんは、数日間で見違えるように太っていましたが、妹の佳子は、病気になるり亡くなってしま

ました。人の運命というものは分からないものです。

孤児院については、協和会三江省本部の事務長として転出していった三原朝雄さんや協和会本部の岡田猛馬さんが、好意に満ちた手記を残してくださいました。

思い出も多いのですが、平成三年の中国訪問で、私が佳木斯を訪ねたときに、佳木斯市永紅区の政府庁舎から出てきた老人が、「昔の孤児院なら案内してやる」と言いながら「うちわ太鼓」をたたくまねをして、「南無妙法蓮華経」と、日本語でお題目を唱えてくれました。

昭和十七年四月、私は、朝日国民学校から佳木斯中学校に進学しました。満人街を通り抜けて四キロメートルの道を通いましたが、当時はもう佳木斯での匪賊の出没の心配はなくなっていました。しかし、友達のなかには、「満人街は危ないので行くな」という家もあったようです。

昭和二十年四月、中学三年になると食糧増産のための勤労奉仕が、日常の仕事になってきました。六月九

日からは、樺川県に入植していた泰阜分村大八浪開拓団に入りました。「ペンを鞆に持ちかえて！」と言えば、格好がいいのですが、佳木斯中学校の勤労奉仕については、戦後に出された大八浪開拓団関係の『開拓団史』にも載っていないようです。私たちの勤労奉仕は、あまり役に立っていなかったのかもしれないが、みなさんはとても親切でした。開拓団のおばさんたちが作ってくれた牡丹餅の味は、忘れられません。その大八浪開拓団の避難行は、悲惨を極めたそうです。『満州開拓史』によると、在籍者八百九十四人のうち無事に故国の土を踏んだ人は、二百五十八人であったそうです。大八浪開拓団の残留婦人の様子は、テレビでも放送されましたが、あの中に、私たち佳木斯中学校の勤労奉仕隊を温かく迎えてくれた人たちがいたかもしれないと思うと、目頭が熱くなってきました。

ソ連参戦の日の昭和二十年八月九日の朝、私たち中学生は農作業を中止して、図佳線の閻家駅から佳木斯に帰りました。その日のうちに、牡丹江経由で南満方

面に避難した友人もいましたが、多くの中学生は、緩佳線を利用して緩化街に向かいました。私は、佳木斯特務機関から支給された、九九式歩兵銃と弾丸五十発を受け取りました。「おれたちも戦争をするのかな？」と思った程度で、まだ緊迫感はありませんでした。

十二日の夜、佳木斯駅から列車に乗り込みましたが、出発は十三日の未明だったでしょう。出発のときは客車でしたが、南义駅からは無蓋の石炭用の貨物列車になりました。豪雨で全身びしょぬれになり震えていました。私が背負っていた中学校の白いカバンが、雨に打たれてべしゃんこになっていましたが、硬いと思っていたカバンの芯は、ボール紙でした。雨によって縫い目がほころびて、中の芯がはみ出てきたのでした。佳木斯中学校の最後を象徴しているように感じました。

三江省民の護衛と言われて、銃まで支給されたのに何もせずに、緩化に着くと避難民と別れて独立守備隊に入りました。

昭和二十年八月十五日、この緩化の独立守備隊で敗

戦を知りました。一緒に避難してきた中学生の大部分は、日本人難民収容所になった緩化飛行場に行きましたが、私は独立守備隊の兵舎に残りました。

八月二十二日に、守備隊の門に白い旗を掲げて、ソ連軍の将校を迎えました。私は、戦闘に参加したこともなく銃も撃たなかったのに、無条件降伏の事態だけは終始体験しました。

翌日、兵舎の裏庭にむしろを敷いて、歩兵銃や銃剣、ピストルなどを並べて武装解除に立ち合いました。ソ連軍の将校は、足早に私たちの前を通り過ぎて行きました。その後、日本の将校服を着た「おじさん」が従っていました。私が、武器の員数を報告しようとする、手を上げて「御苦労さん」と声を掛けてくれました。この「おじさん」は、見覚えのある顔でした。独立守備隊の本隊は第一線に出た後で、この「おじさん」たち軍人は、臨時召集で軍服を着た市民だったと思います。

私が佳木斯から持ってきた物は、雨で使いものになりません。将校服の「おじさん」が、「倉庫に行つて

「ごらん、毛布や軍服があるから」と教えてくれました。倉庫の中には、衣類が山のように積んでありました。私は、ここで佳木斯中学校のカバンを捨ててリュックサックに替えました。ゲートルや軍手もリュックサックに詰め込みました。これらの品物は、後々、物々交換に大変に役に立ちました。

一時避難しても、すぐ佳木斯に帰れるつもりでいたのに、一カ月足らずの間に難民になってしまいました。

私は、守備隊から日本人の難民収容所となっていた綏化飛行場に移りました。そこで気付いたのですが、多くの中学生の家族は、綏佳線でここ綏化の飛行場に避難していたのに、私の家族は、松花江を船で避難していたのです。そのため私は、家族とばらばらになってしまいました。家族と別行動になった中学生は、全部で十七人でした。

収容所で食べ物もなく困っていたときに、佳木斯中学校教諭の徳永恵先生から、「お前のところには何人いるか、報告するように」との指示があり、十七人と

報告しましたが、後で十七人分のマントウが配られました。

十七人の名前はほとんど忘れましたが、この十七という数字は、マントウの数と重なって未だに鮮明に記憶されています。綏化飛行場では、約一カ月の避難民生活でした。

佳木斯では厳しい訓練に耐えていた人たちも、みんな哀れな難民になってしまいました。飛行場周辺の芋畑へ忍び込んで、満人に追いかけていました。

知人の朝鮮人に頼んで、衣類と食糧との交換にも出掛けました。わずか一カ月足らずで、人はこんなにも変わるものでしょうか、つくづく考えさせられました。

そんなときに、「重岡君のお母さんは、哈爾濱の興亜塾にいるそうだ！」と三江省民会の人から連絡がありました。

早速、綏化駅発の最初の避難列車に乗り込んで哈爾濱に向かいました。無蓋貨車で哈爾濱駅に着きましたが、ここで敗戦の悲哀を痛切に実感しました。

哈爾濱では、小学校の二、三年を過ごしましたが、哈爾濱駅のプラットホームには、伊藤博文公が銃弾に倒れた場所が、丸く縁取りされて、その中には色ガラスがきれいに組み合わされて、キラキラと光っていたことを覚えてあります。哈爾濱駅に行ったときには、必ずのぞいたものです。そのつもりで、駅に着いてまず最初にそこへ行きました。

しかし、その遺跡の周りにあった八十センチメートルほどの高さの細い鉄柱が、折り曲げられています。縁取りの中の色ガラスは、全部割られて光を失ったガラス片になっていました。今までに、この遺跡の政治的な意味を考えたことはありませんでしたが、無残な破壊ぶりは、日本に対する報復心の凄まじさを見せつけていました。昭和二十一年の春に、使役で哈爾濱駅に行った時に、遠くからあのプラットホームを眺めました。もう伊藤博文公の遺跡は見受けられませんでした。

哈爾濱駅を出て左に五百メートルほど行った所にある霽虹橋を渡るときに、汚れた服にリュックサックを

背負った日本人避難民の行列を見ている中国人の視線を感じました。中国人の侮蔑の眼差しにはもう慣れていましたが、今は同情と哀れみを受けて敗戦国民を意識していました。

満州で育ち、ほとんど日本を知らない私が、日本を恋しく思うようになっていました。それでも、哈爾濱の斜紋街から地段街に入り、「登喜和」「丸商」の百貨店を見て、安どしました。「登喜和」の支店は佳木斯にもありました。

「丸商」の四階には、協和会の事務所もありました。日本人避難民が収容されているということでしたが、建物は昔のままでした。

ソ連軍の侵攻から一カ月、やっと家族が出会うことができました。父は、昭和十九年の召集で、北京近くで終戦を迎えており、家族全員がそろったのは昭和二十二年の春のことです。

哈爾濱の興亜塾は、満州国官吏の宿泊研修施設でした。難民収容所となって、我が家に割り当てられた部屋は六畳一間でしたが、「もう一人、もう一人」と同

居者が送り込まれて、押し入れも寝台になりました。

興亜塾でも、毎日、老人や子供が死にました。奥の死体置き場では、毎朝、お念仏やお題目が聞かれましたが、ここでは賛美歌まで歌われていました。死体は、興亜塾の裏庭に仮埋葬しましたが、冬になる前に、中国人が掘り出して大車の荷台に死体を山積みにして運びました。その際に、死体の口を手で開いて金歯を抜き取っていました。

遺族は、他の収容所に移っていて現場を見ないで済んだのが、せめてもの慰めでした。

冬を前にして、たきぎを集めておこうと思い、興亜塾の塀の木部を取り外して束にしてみました。そこに中国人の警察官が来て、私を捕らえました。地段街派出所に連れ込むと、平手打ちで私の顔を張りました。

「なぜ、ここに呼ばれて殴られたか、分かるか？」と言われ、見事な日本語でしたが、私は黙っていました。「自分が悪いことをして、分かんのか」と更に言っていました。

さんざん嫌みを言われたうえに、私の罪は、中国の

財産である興亜塾の塀を壊して盗んだことになってしまいました。

三江省民会の世話をしていた高橋さんという人が、そのお詫びに派出所の掃除をすることになりました。

それから間もなくして、私は興亜塾を立ち退くように命ぜられ、収容所を転々とすることになりました。生活費には随分と困りました。哈爾濱在住の人たちは、売り食いもできませんが、避難民はそれもできず、煙草や雑貨、食べ物などを街頭で売り、その日その日の生活費を稼ぐのがやっとでした。一部の人を除いては力仕事もありませんでした。

私は、空きビルのガラス外しを始めました。夜になると、空きビルに忍び込んで、木枠からガラスを外すのです。小刀で、ガラス止めのパテをはがし、三十センチメートル以上のガラス板を十数枚ずつ、街のガラス屋に売りに行くのです。最初のうちは、一日三十円から五十円になりました。まるで泥棒のような仕事でしたが、戦前にこのビルにいた人たちからの連絡でやっていたので、盗みという感覚はありませんでした。

收容所に、使役の割当てがきました。「牡丹江方面での道路工事、一カ月ぐらいの予定」ということでした。一度使役に出たら、帰れないかもしれないと言われ、みんなはしりごみしていました。

私は、運よく使役から外れて、同じ部屋の人が行くことになりました。くじ引きなので不運としかいいようはないのですが、その人は老人と小さな子を抱えており、困っていました。そして、私のところに相談にきました。「お宅は、みんな無事に避難されてうらやましい、どこの家でも一人や二人は死なせているのに」などと話し込んだ揚げ句に、「三百円で交替してもらえないか？」と申し込まれてしまいました。

昭和二十一年の春のことです。街角で売っている大福餅が、一個二円です。三百円ですと、大福餅百五十個分の値段になります。なぜ私が三百円ということにこだわるのかというと、当時、中国人の人買いが盛んで、ねらわれるのは日本人の子供でした。特に、就学前の幼児が喜ばれていました。

私の弟で四歳になる中山は、栄養失調気味でした

が、人買いの標的になっていました。「五百円で預けないか？」と何度も話がありました。その折に、「おれは、幾らになるか？」と私が聞いたところ、「お前はいらん、もしおとなしく言うことを聞くなれば二、三百円だ」ということでした。私は小柄でしたが、中学校三年で十五歳です。「必ず逃げ出す」と言うのです。逃げるのと分かっている者には、金を出さないというのは道理のあることです。

私は使役を交替して哈爾浜駅に行きました。本駅から離れたところの、側線の多い場所でした。本駅から離れたところには、千人以上の日本人の使役がいてびっくりしました。どこかに連れて行かれるのかという不安に包まれていました。そのうちにソ連兵が、銃で人をつつきながら進んできました。

私の隣にいた老人が、銃で列の外に突き出されました。その勢いで、私も老人と一緒に列の外に出てしまいました。体力のなさそうな者は、作業隊から除外していたのです。私は運よく、除外される組に入りませんでした。

昭和二十一年春に、「国府軍と中共軍が衝突しそうなので、外には出ないように！」という連絡が伝えられました。私には、「収容所間の連絡係をしてくれ」と、三江省民会の高橋さんから通知がありました。

「もしも、路上で誰何されたら、すぐに立ち止まって、両手を頭の上にあげるようにしなさい。逃げる素振りを見せたら撃たれるから」と注意がありました。連絡係と言っても、主な仕事は手紙を所定の収容所に運ぶだけです。ときには、疥癬病の薬を運んだこともありましたが。内戦らしい撃ち合いもなく、そのうちにまた、街頭での行商なども始まるようになりました。

私は、日々の生活費には困りましたが、それ以外はあまり緊張感のない毎日を過ごしていました。哈爾濱では、佳木斯中学校の先生や友人と会う機会も少なく、満人街にまで足を延ばして行商用の仕入れなどをして生計をたてていました。

しかし、新京では、同級生の頼元利夫君が、ソ連兵の暴行から母親を守ろうとして、撃たれて死亡したということでした。悲しい出来事でした。

佳木斯農事試験場の金田一貫之さん一家六人の消息は、戦後五十余年が過ぎた今日でも分かりません。佳木斯中学校の仲間も、約半数の人が消息不明です。

父は、昭和十九年二月の召集で中支に派遣され、部隊で渉外業務を担当していたようです。終戦後は、旅団司令部の帰国還送業務に従事していましたが、昭和二十年十月に、北京市内の安定門内にあった「ラマ教」の寺に入りました。この寺には、日蓮宗の僧侶であった深沢世伝上人がいたので頼って行ったのだそうです。

北京時代の父については、北平日本連絡班の園田真平さん（元北京興亜塾長）が、『北京戦犯・生と死』に記録してくださいました。

父は、満州の様子を探るためにわざと残ったようです。北京も、戦後の混乱が続く、日本人避難民が随分と行き倒れになっていたそうです。そこで、亡くなった人たちの遺体処理が大問題になりました。北京には朝陽門外に日本人墓地がありました。火葬炉四基のうち二基は使用可能だったようです。この墓地は、

「義和団事件」の際に殉職した日本軍将兵の霊を慰めるために、清朝から提供されたものでした。

北平日僑自治会からの要望で、深沢上人と父の二人は、日本人墓地に移りました。もちろん、火葬場業務は父にとっても初めての仕事でしたが、考えてみれば、打ってつけの奉仕作業でした。骨は、自治会に届けることになっていましたが、遺族に直接渡すこともできたそうです。

父の帰国が遅れたのは、火葬場奉仕のためでしたが、昭和二十二年三月末になって、やっと無事に帰国できました。私たちは、半年前の昭和二十一年十月九日に、博多港に引き揚げておりました。

家族全員が、無事にそろったのは、終戦から一年七カ月経ってからでした。それでも、家族が元気で日本に帰れたことは、何ものにも代え難い、幸福なことでした。

我が家にとっては、生活苦ということとは戦前からの延長ですが、戦後は一段と苦しくなりました。

家族がそろったところで、熱海市の西山町という所

から、四キロメートルぐらい奥に入った所に生活の場を求めました。近くに「一里茶屋」がありました。ここに「立正堂農場」の看板を出して開墾を始めました。その前に、山口県の徳山中学校に通っていた私は、三年で中退して農業の手伝いを始めました。

父の農業好きは、満州からの続きで、実際は農業を知らないのです。東北地方から青年を招いて五十アールほどの農地を開いたのですが、種をまいても、強風のため土ぼこりとなって飛び散り、発芽しません。サツマイモの苗を植えて、「丸山式だから……」と自慢していましたが、食用になるような芋はできませんでした。鶏を二千羽ほど仕入れましたが、これも一週間も経たないうちに全滅してしまいました。

農業は失敗なのですが、父は大陸生活を思い、「今はただ、罪滅ぼしがただ一つの道、困苦の生活を求めて、耐乏と勤労の中に一意、贖罪の明け暮れに終始……」と『筭木良明遺芳録』に書き残していました。が、その通りの生活を実践しようとしていたのです。農業で収穫を夢見たものの、失敗しても、土に親し

み、うそのない生活をするのを希望していたのでしよう。

戦後、静岡県東部から代議士になった、久保田豊さんから、「仕事を見つけたので、行ってみないか」と何度か手紙をいただきましたが、父は「私は、就職する気はありません」と返事をしていました。また、「中国語辞典をまとめてみないか」と、出版社の知人が大きな包みを二つも送ってきました。原稿用紙でしたが、項目を書き出しただけで、まとめることはできませんでした。

父の求道生活は理解しても、私は、見通しのない農業生活には、ついて行けません。旧制中学の三年生だけでなくも三度も経験したのです。父の反対を押し切って熱海高校に編入学しました。しかし、授業料も、諸会費も未納の状態でした。「これで、ここも退学か」と思ったときに、同校教諭の佐藤ます先生が、私の身柄を引取り、その後は、先生のおかげで学生生活を続けることができました。佐藤先生が、父を訪ねてきて我が家を見て、「こんな貧乏とは思わなかった」と、

涙を流されました。

父は、満州国の役人生活を通して、満州国を見つめ、孤児院、救済院、満人の開拓村である立正村まで作りしましたが、理想を果たすことはできず、また、帰ってきてからも失敗しました。そして、昭和三十五年八月、五十八歳でその生涯を閉じました。

父は、自分の考えを押し通してきたのですが、私には、真似のできない生き方でした。

## 軍属三カ月で流浪の旅へ

奈良県 森川 巳三

私は昭和四年三月二十五日に、大阪府堺市で父寿一、母こむめの長男として生まれた。姉と二人姉弟だったが、私が七歳のときに父が病気で死亡したので、母と共に大阪市の山ノ下町に移って育った。そこで小学校を終えて市立の機械養成所に入り無事に卒業した。